

# 寺井町佐野 A 遺跡

—基幹排水対策特別事業佐野地区に  
係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

1995

石川県立埋蔵文化財センター



# 寺井町佐野 A 遺跡

—基幹排水対策特別事業佐野地区に  
係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

石川県立埋蔵文化財センター



# 例 言

1. 本書は平成3年度に実施した基幹排水対策特別事業佐野地区に係る佐野A遺跡の緊急発掘調査報告書である。調査地は、石川県能美郡寺井町佐野地内にあたる。
2. 調査は石川県農林水産部耕地建設課の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査に係る費用は県農林水産部耕地建設課の負担による。
3. 現地調査の期間、面積、担当は以下のとおりである。また調査員として田畑 弘、松田英博の補助を受けた。

調査期間 平成3年5月7日～同年6月1日

調査面積 約500㎡

調査担当 調査第一課 中島俊一、川畑 誠

4. 事前協議および現地調査の実施に関しては、県農林水産部耕地建設課、県小松土地改良事務所、また北角耕一氏をはじめとする地元佐野町内の関係各位の御協力をいただいた。記して、感謝の意を表する。
5. 出土遺物の整理作業は、平成4年度に(財)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。また資料整理、写真撮影などに関して下記の方々の補助を受けた。

田畑 弘、松田英博、大藤雅男（以上、調査員）、越田洋子（作業員）

6. 報告書作成にあたっては、下記の方々より御指導・御教示をいただいた。記して感謝申し上げる。

永野耐造、田嶋明人、浜崎悟司、本田秀生、安 英樹（敬称略、順不同）

7. 報告書刊行に係る事務は中島が担当し、執筆は中島との打ち合わせのもと川畑がおこなった。
8. 本書における挿図等の扱いは以下のとおりである。

- (1) 挿図中に指示した方位は全て座標北である。また水平水準は海拔高である。
- (2) 挿図の縮尺は図中に明記した。
- (3) 写真図版の出土遺物の縮尺は不定であり、付した番号は挿図番号に一致する。

9. 調査によって得られた記録資料および出土遺物は、県立埋蔵文化財センターにて一括保管している。貸し出し等をおこなっているのが有効に利用していただきたい。

# 目 次

## 例 言

第1章 位置と環境 .....	1
第2章 調査に至る経緯と経過 .....	3
第3章 調査の内容 .....	5
第1節 調査の概要 .....	5
第2節 A、Bトレンチ .....	6
第3節 Cトレンチ .....	17
第4章 まとめにかえて .....	20

## 挿 図 目 次

第1図 調査区周辺の遺跡 (S=1/25,000)
第2図 調査区の位置 (S=1/3,000)
第3図 調査区全体図 (S=1/300)
第4図 A、Bトレンチ土層柱状図 (S=1/60)
第5図 A、Bトレンチ遺構実測図 (S=1/60)
第6図 Bトレンチ南端大溝実測図 (S=1/60)
第7図 Cトレンチ南壁土層柱状図 (S=1/60)
第8図 Bトレンチ出土遺物実測図1 (S=1/3)
第9図 Bトレンチ出土遺物実測図2 (S=1/3)
第10図 Bトレンチ出土遺物実測図3 (S=1/3)
第11図 Bトレンチ他出土遺物実測図 (S=1/3)
第12図 Cトレンチ遺構実測図 (S=1/150)
第13図 Cトレンチ他出土遺物実測図

(S=1/3、1/2)

## 図 版 目 次

図版1 Aトレンチ遺構その1
図版2 Aトレンチ遺構その2
図版3 Bトレンチ遺構その1
図版4 Bトレンチ遺構その2
図版5 Bトレンチ遺構その3
図版6 Cトレンチ遺構その1
図版7 出土遺物その1
図版8 出土遺物その2

# 第1章 位置と環境

佐野A遺跡は、石川県能美郡寺井町佐野地内に所在する。寺井町は、県庁所在地である金沢市の南西約15kmに位置し、面積約13.2km<sup>2</sup>、人口約1万6千人を数える。町城北縁は県下最長の手取川に、南縁は梯川支流の鍋谷川(通称、長曾川)に面し、東部には標高100~200mの能美丘陵がなだらかに迫っている。また町域の大部分は手取川の形成した扇状地上に位置し、標高7~10mの低地に属する。そして町域中央から東側にかけて、早壮年期の隆起丘陵が沈降の際に取り残された5つの独立丘陵(和田山、末寺山、寺井山、秋常山、西山)が点在する。

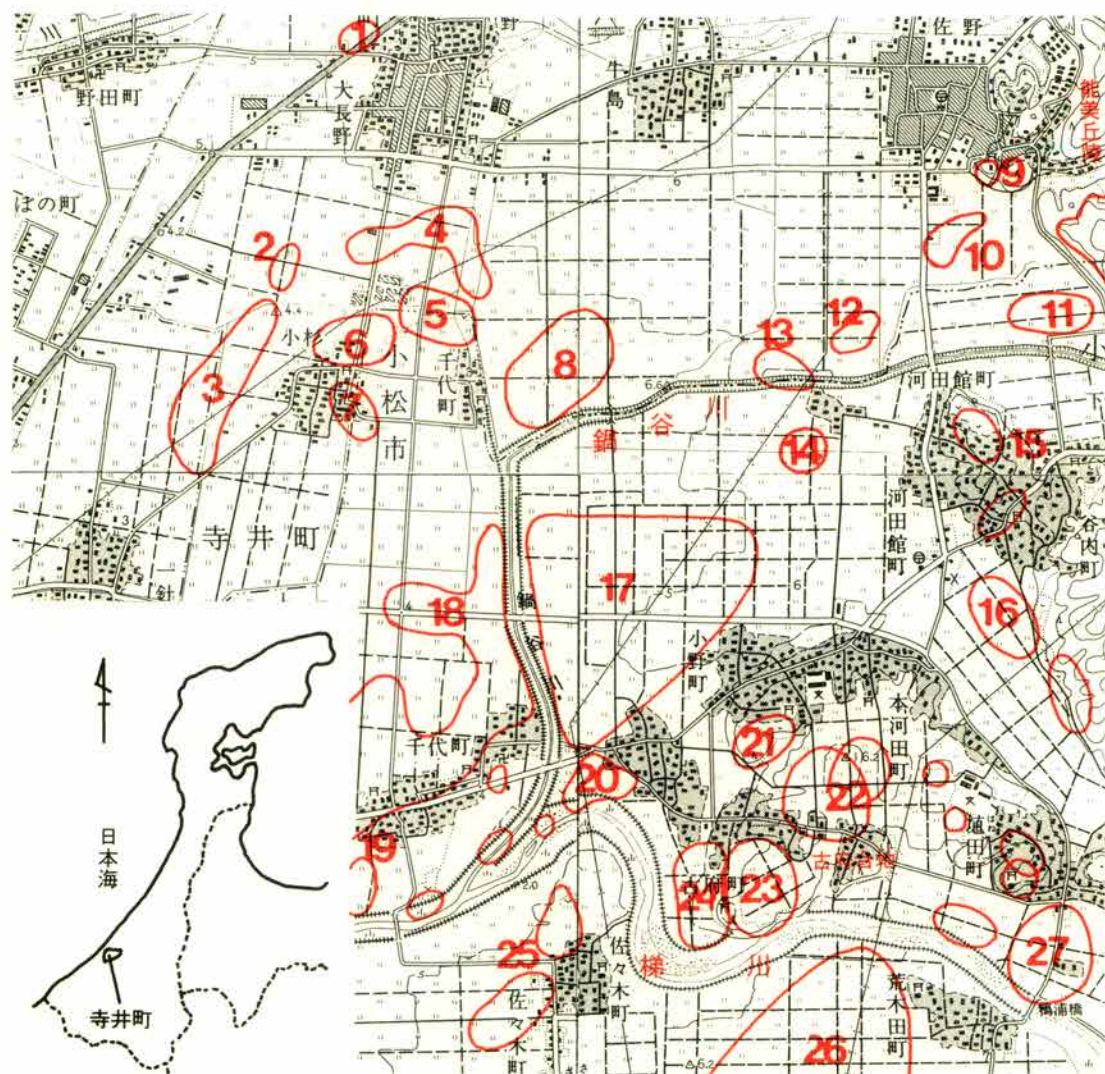
本遺跡の所在する佐野は、寺井町の東南端に位置する。集落域は北側に展開し、南側は一面の平坦な水田地帯となっている。本遺跡は佐野地内南西側の鍋谷川に隣接した自然堤防上に立地し、『寺井町史』第3巻によれば調査区周辺には「南川屋」、「本河田」などの小字名が残る。また鍋谷川を挟んで小松市河田、八里に接する。

次に本遺跡周辺の歴史的環境について述べる(第1図)。縄文時代の土器は、牛島ウハシ遺跡(前期末葉)、千代オオキダ遺跡(晩期)などで確認されているが、いずれも断片的な資料で、その実態は不明である。東側の能美丘陵には、縄文時代の集落遺跡が多数存在することから、後期以降に本遺跡周辺の低地帯へ本格的進出を果たしたと考えられる。

弥生時代前期~中期の様相も同様に不明瞭である。本遺跡南側の梯川流域左岸の自然堤防上で集落遺跡の濃密な分布が確認できることと好対照をなす。弥生時代後期後半以降は本遺跡周辺でも集落遺跡が急増し、ひとつの画期となる。これは県内の動向と軌を一にしたものといえる。低地では本遺跡や佐野B遺跡、牛島ウハシ遺跡、千代デジロA、B遺跡、大長野A遺跡、大長野B遺跡などが、また東側に隣接する能美丘陵でも大規模な集落遺跡が確認されつつある。古墳時代は同地域は隆盛を誇ると考えられる。地域の盟主的支配集団の墓域と考えられる60基以上の古墳(能美古墳群)が前述の独立丘陵上に築かれることに代表されるように、周辺丘陵上での古墳の築造が活発となる。一方、集落遺跡は、前時代から継続して営まれたと考えられるものの、その具体的様相は明らかとなっていない。周辺地域では、本遺跡や佐野B遺跡、牛島ウハシ遺跡、千代デジロA、B遺跡、大長野A遺跡などで当時代の遺物が確認されるのみである。古墳時代後期になると集落遺跡数はさらに減少傾向を強め、その動向は7世紀前後まで一層不明瞭となる。古墳の築造は依然として活発である。

7世紀(特に後葉)以降は、佐野B遺跡、佐々木ノテウラ遺跡(7世紀~)、千代デジロB遺跡、荒木田遺跡(8世紀中頃~)、本遺跡にみるように、集落遺跡は再び増加傾向に転じる。ただし、その増加度合いは梯川流域左岸も含めて、県内他地域と比較して顕著な痕跡を示さないことが既に指摘されている。弘仁14(823)年には越前国より江沼・加賀の二郡を割いて加賀国が立国、本遺跡周辺は加賀国能美郡得橋郷に属する。また梯川流域両岸域を中心に集落遺跡の展開からも大きな画期となる。本遺跡周辺では佐野八反田遺跡、狹野神社前遺跡、牛島宮の島遺跡、牛島ウハシ遺跡、千代デジロC遺跡などが確認できる。この加賀国府所在地は、少なくとも10世紀代は古

府台地周辺が想定されており、本遺跡周辺の集落遺跡の活発化もそれを対応するものと考えられる。また周辺丘陵上で寺院遺跡が点在して存在する他、条里の施行痕跡の復元もなされている。なお古府しのまち遺跡周辺には「能美千軒、国府千軒」との口承が残る。中世の集落遺跡では、14世紀以降に成立したと考えられる牛島宮の島遺跡、牛島ウハシ遺跡などが確認でき、前者は牛島集落の故地との伝承が地元では残っている。また文献から、佐野は加賀国能美郡得橋郷に含まれ、村内は南・北に分村していたことがわかる。そして鎌倉時代～室町時代は南禅寺領に属し、長享2(1488)年の加賀一向一揆以降は本願寺門徒の支配するところとなった。



- 1 小長野B遺跡、2 大長野B遺跡、3 大長野A遺跡、4 牛島宮の島遺跡、5 千代デジロC遺跡、6 千代デジロA遺跡、7 千代デジロB遺跡、8 牛島ウハシ遺跡、9 狭野神社下遺跡、10 佐野B遺跡、11 河田向山下遺跡、12 佐野八反田遺跡、13 佐野A遺跡、14 下出地割遺跡、15 河田館跡、16 河田C遺跡、17 古府しのまち遺跡、18 千代オオキダ遺跡、19 千代マエダ遺跡、20 古府遺跡、21 十九堂山廃寺、22 小野、小野スギノ遺跡、23 南野台遺跡、24 古府しま遺跡、25 佐々木アサバタケ、ノテウラ遺跡、26 荒木田遺跡

第1図 調査区周辺の遺跡 (S=1/25,000)



江戸時代には加賀藩領となる。特記すべき事項としては、天保6(1823)年に桶屋伊三郎が村内丘陵から産出する赤埴土、佐野石という陶土を利用して佐野窯を開いたことがある。このことが、佐野集落が現在に至るまでの九谷焼の中心産地としての基盤をつくったといえよう。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

本遺跡の発掘調査は、県農林水産部耕地建設課と県小松土地改良事務所主管の基幹排水対策特別事業佐野地区に係るものである。本事業は、米の生産調整を目的に昭和63年度から実施されている水田農業確立対策の円滑な推進と転作の定着化を図るため、排水条件が悪く転作が困難な地域において、排水機場、排水樋門、排水路等の新設、改修をおこなうものである。それにより、排水不良の解消および労働生産性の向上を達成するとともに、農家経営の安定を図ることを目指している。同地区では、平成元年度より受益面積約54haを対象として事業着工がなされ、水稻+疎菜(トマト)を基幹作物とすることが計画されている。

県立埋蔵文化財センターは、平成2年度に県農林水産部耕地建設課より事業地区の埋蔵文化財の有無に関する調査依頼を受けた。ちょうど、周辺の水田では県営ほ場整備事業寺井南部地区に係る分布調査が進行中で、事業地区に隣接する水田は同年10月に分布調査がおこなわれた。その結果、鍋谷川北岸の微高地上の南北方向約120m、東西方向約100mの範囲に埋蔵文化財の存在が確認され、事業地区内2箇所でも埋蔵文化財の保護に影響が生じることが判明した。その後、県立埋蔵文化財センターは関係機関と協議を進め、平成3年度に埋蔵文化財に影響が生じる範囲(約500㎡)において緊急発掘調査を実施することが決定した。

現地調査は平成3年5月7日～6月1日に、調査第一課主査中島俊一(現、同課課長)、同主事川畑 誠(現、(社)石川県埋蔵文化財保存協会主任調査員)が担当して実施した。また調査員として、田畑 弘(現、新潟県田上町教育委員会職員)、松田英博(現、宇ノ気町教育委員会職員)の補助を得た。

出土品等整理作業は、(社)石川県埋蔵文化財保存協会に、平成2年度は出土遺物の洗浄作業を、平成5年度は出土遺物の接合、実測、トレース作業等をそれぞれ委託して実施した。また同時に直営で図面整理、写真撮影、図版作成などの作業を実施した。

以下、調査日誌抄、調査参加者を記す。

### 調査日誌抄

- 5月7日 現地にて県小松土地改良事務所担当者とは打ち合わせ。重機による表土除去作業を実施する。
- 5月8日 重機による表土除去作業を実施する。仮設建物設営。
- 5月13日 発掘機材等の搬入をおこなう。
- 5月15～18日 排水作業、調査区周辺除草作業、杭打ち作業などを実施する。
- 5月20、21日 Aトレンチで遺構検出作業、遺構掘り下げ作業を実施する。引き続き、図面作成作業、写真

撮影作業をおこない終了。Bトレンチで包含層掘り下げ作業を実施。

5月22、23日 Bトレンチで遺構検出作業、遺構掘り下げ作業を実施する。南端大溝は湧水が著しいため、掘り下げ作業に難渋する。併せて図面作成作業を進行。

5月24日 Bトレンチの図面作成作業、写真撮影作業をおこなう。

5月27、28日 Cトレンチの排水作業、排水溝掘削作業、包含層掘り下げ作業を実施。調査区の大部分が沼状落ち込みに含まれることが判明したため、部分的な確認調査をおこなうことにする。木製遺物が少量出土する。写真撮影作業の後、図面作成作業をおこなう。

5月29日 Cトレンチの図面作成作業と併せて、機材整理、撤収作業を実施。現地調査を終了する。

～6月1日

#### 調査参加者

西田庄信（寺井町字佐野）、石浦明子、石浦裕子、川島秀子、北浦なつ、田中喜久代、辰巳教枝、辰巳洋子、中山玖子、本田菊枝、平野とめ、平野芳恵(以上、同町字牛島)

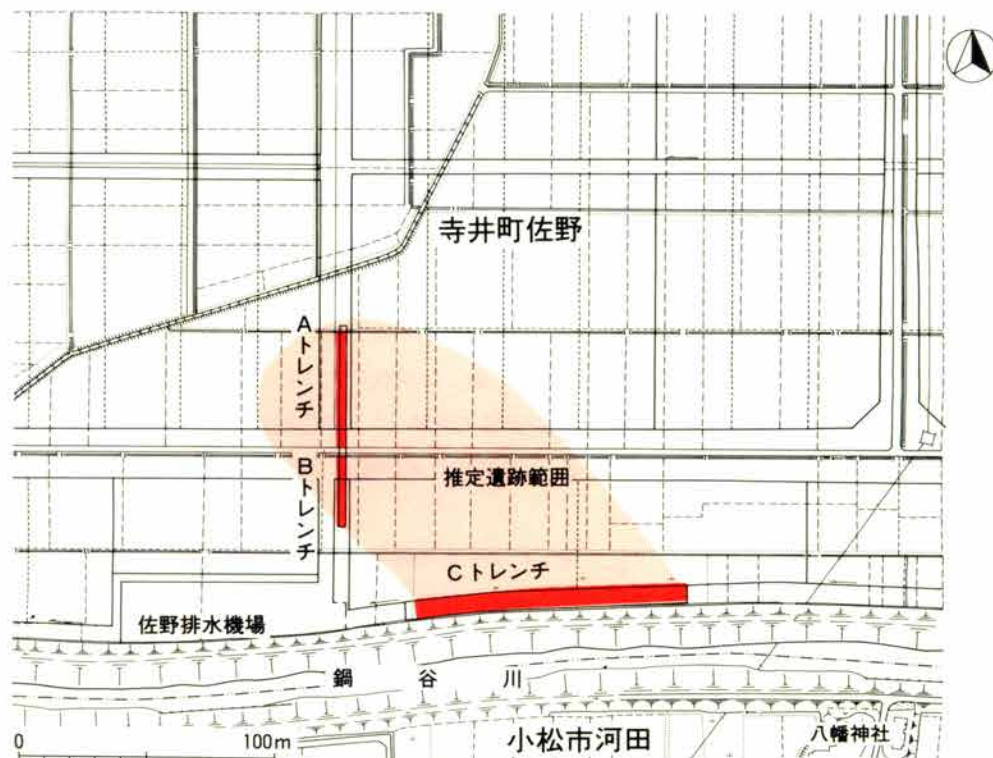
### 第3章 調査の内容

#### 第1節 調査の概要

発掘調査は、鍋谷川右岸の排水機場に接して敷設される基幹排水路予定部分2ヶ所(対象面積約500㎡)を対象に実施した。調査区周辺は、県営は場整備事業寺井南部地区がほぼ並行して実施され、現在は大規模水田が整然とならぶ。調査区周辺の現水田面の標高は、約5.50~6.10mを測り、西側および鍋谷川に向かう南側に緩やかな傾斜を示す。

調査区は第2図のようにA~Cトレンチと細分、呼称した。A、Bトレンチは鍋谷川に直交する基幹排水路上に設定し、農道を挟んで北側からAトレンチ(長さ約42m、幅約2m)、Bトレンチ(長さ約43m、幅約2m)となる。A、Bトレンチの起点は、Aトレンチ北側の基幹排水路予定中心線上に任意に設定し、調査区主軸線は基幹排水路の中心線(N-0°)と一致する。Cトレンチは、鍋谷川に平行するように敷設される基幹排水路上に設定した。調査区の起点はトレンチ西側に任意に設定し、調査区主軸方位はN-84.5°-Eを示す。調査区は長さ約80m、幅3~4mを測る。

調査の結果、本遺跡は鍋谷川右岸の微高地(自然堤防)上に立地する弥生時代後期後半~古墳時代初頭および古墳時代中期の集落遺跡と考えられる。ただし後述するように、後世の水田整備等による地山面の削平が著しく、標高が下がる地点に位置する溝を除き、明瞭な遺構は検出できな



第2図 調査区的位置 (S=1/3,000)

かった。分布調査の所見によれば、南北方向約120m、東西方向約100mの範囲に遺物を含んだ土層の広がりを確認できる。Aトレンチでは、西側に流下する溝2条、土坑1基を検出したが、包含層を含めて遺物の出土をほとんどみなかった。Bトレンチでは、弥生時代後期後半～古墳時代初頭および古墳時代中期の遺物を出土する溝1条、大溝1条を検出したにとどまる。遺物は当該時期の土器を中心にコンテナバットで9箱を数え、大部分はBトレンチ大溝覆土中から出土したものである。Cトレンチは、その大部分が鍋谷川の旧流路もしくは氾濫原と考えられる沼状の落ち込みとなり、遺構は存在しなかった。若干量の土器、木製遺物が出土した。なお調査区周辺の水田より、奈良・平安時代の須恵器、土師器細片少量が表面採取できた。

## 第2節 A、Bトレンチ

### 1. 遺構 (第2～6図)

A、Bトレンチは本遺跡の中心部と考えられる。Aトレンチでは、ほぼ西側に流下する溝2条などを確認した。現在の水田地割り方向との一致や土層観察などから、かなり新しい時代に属するものと考えられる。Bトレンチは、後述するように後世の削平が最も著しい箇所と考えられる。調査区南側で弥生時代後期後半～古墳時代初頭および古墳時代中期の遺物を出土する溝1条、大溝1条を検出した。

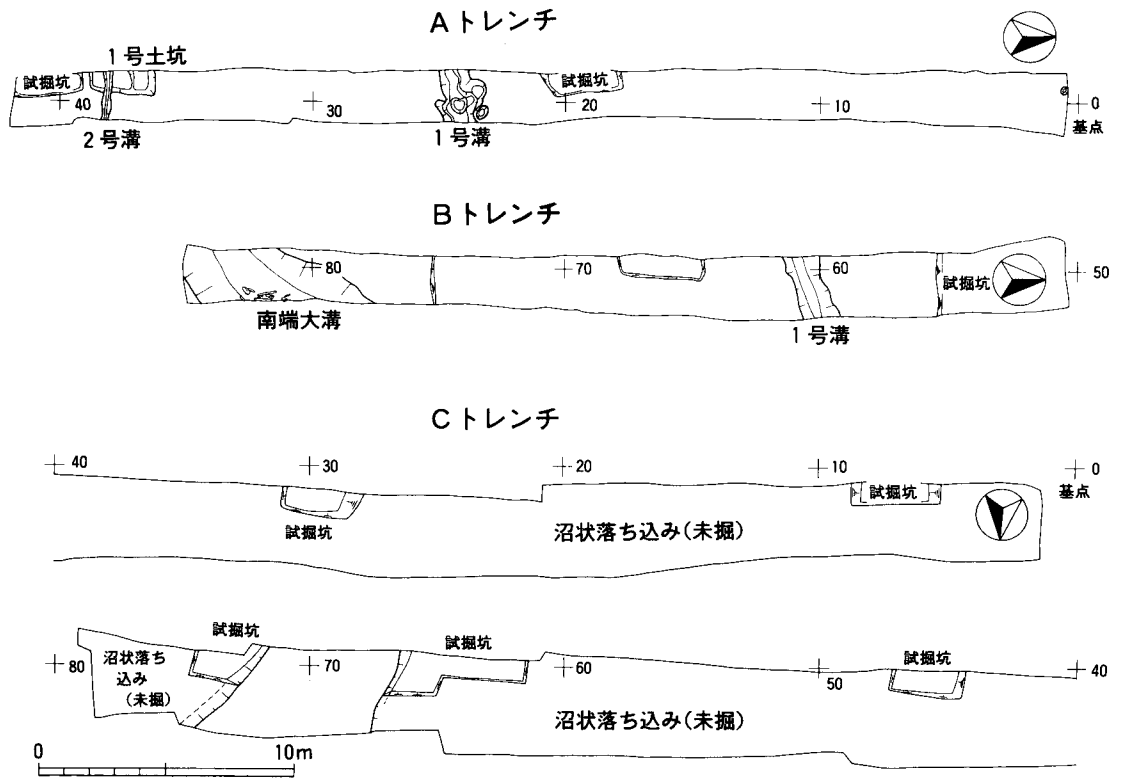
基本土層層序(第4図)は、上層より第1層：灰色土(現耕作土)、第2層：淡灰色粘質土(床土)、第3層：褐色粘質土、第4層：やや汚れた黄灰色砂質土(地山土)となり、第2層は調査区南側に向かうにつれ明黄色砂質土に変わる。第3層は若干量の遺物を含むことから、包含層と考えられるが、調査時は二次的に堆積した土との印象を受けた。20m地点では、第4層は厚さ約35cmを測り、その下には鉄分を含んだ青灰色強粘質土が堆積する。また、第2層は35～75m付近では欠落、特に50～75m付近は耕作土直下に地山土が存在するなど、後世の削平がかなり顕著に認められる。これらのことから、本来の地形は調査区中央付近がもっとも高く、南側および北側に緩やかに傾斜したのと考えられる。現水田面の標高は5.50～5.60mを測る。

Aトレンチ1号溝 23～25m付近で検出し、西側に流下する。幅1.30～1.90m、深さ約50cmを測り、肩部の乱れが著しい。土層観察などから最も新しい時代におこなわれた耕地整理前の水路と考えられる。覆土は上層より灰色粘質土(溝底絶後の埋め土)、灰色粘質土と灰茶色砂の混合土、灰色砂と灰色粘質土が交互に堆積した土層(溝機能時の水の流れて形成)、灰色粘質土となる。出土遺物はない。

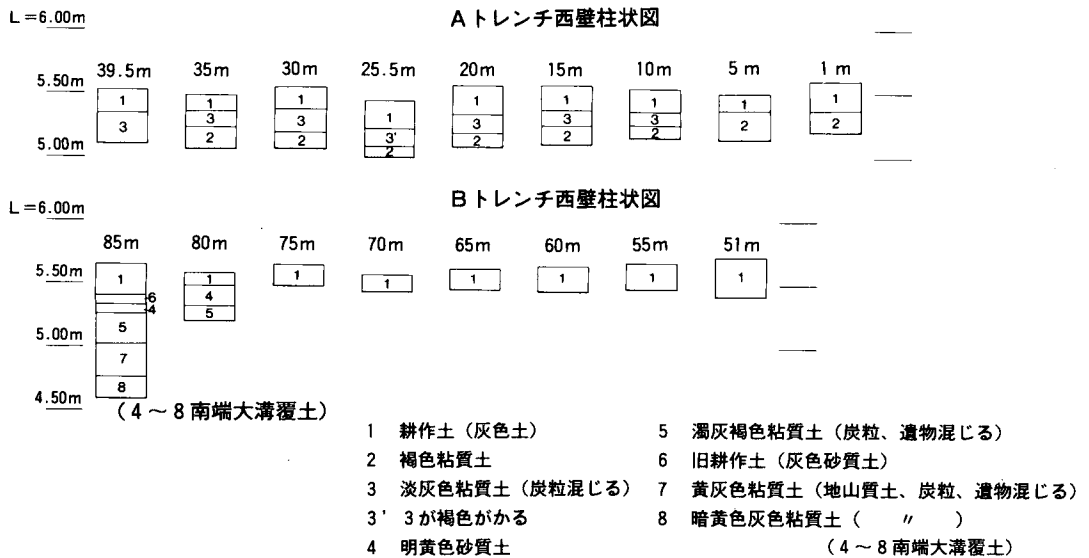
Aトレンチ2号溝 38m付近で検出し、Aトレンチ1号溝と同時期に底絶したと考えられる。西側に流下し、幅30cm、深さ15cmを測る。覆土は灰色粘質土の単層で、出土遺物はない。

Aトレンチ1号土坑 36～39m付近で検出し、Aトレンチ2号溝に切られる。平面略方形を呈すると考えられ、側壁はなだらかに立ち上がる。西側土層断面上幅3.24m、下幅2.85mを測り、底面は平坦でない。覆土は暗灰色強粘質土の単層である。出土遺物はなく、時期不明。

Bトレンチ1号溝 60m付近で検出し、西方向やや南に振れて流下する。幅1.05～1.40m、深さ



第3図 調査区全体図 (S=1/300)



第4図 A、Bトレンチ土層柱状図 (S=1/60)

0.14mを測る。覆土は暗灰褐色粘質砂の単層で、第8図1、2が出土した。

Bトレンチ南端大溝 77～85m付近で検出し、南西方向に流下する。幅約3.70m、深さ65cmを測り、肩部は緩やかに立ちあがる。覆土は上層より濁灰褐色粘質土、地山質の黄灰色粘質土、地山質の暗黄灰色粘質土が自然堆積する。遺物は弥生時代後期後半～古墳時代初頭および古墳時代中期の土器(第8図3～第11図47、第12図54)、自然木、頭髮状の有機遺物などが出土した。自然木は濁灰褐色粘質土中に混ざり、東側に集中する。また頭髮状の有機遺物は自然木の間から出土し、取り上げ時には長さ20cm前後を測るものもあった。調査時もかなり冷たい湧水が噴出したことから、残存しえたと考えられる。その後、永野耐造氏(当時、金沢大学医学部教授)に人間の頭髮かどうかの鑑定を依頼したが、遺存状況が悪いため判別不能であるとの鑑定結果をいただいた。

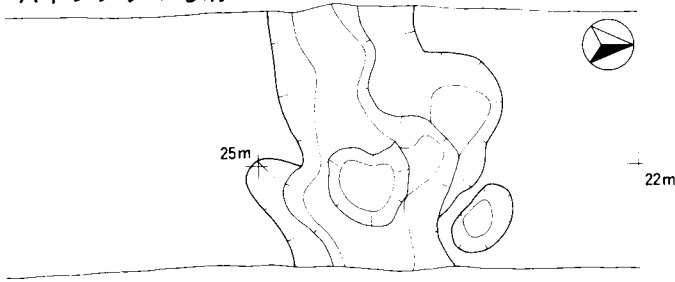
## 2. 出土遺物(第8～11図、第6表)

遺物はそのほとんどが南端大溝覆土中より出土し、包含層からは若干量の摩滅した土器細片が出土したのみである。時代からみれば、弥生時代後期後半～古墳時代初頭(I期)、古墳時代中期で、須恵器出現期とされる5世紀前半代(II期)、奈良・平安時代(III期)に大別できる。さらにI期に属する土器は、弥生時代後期後半(2、4～8、19、21～23、35、41、45など)、弥生時代末(9、18、20、24、44など)、古墳時代初頭(1、12、26、28、36、46、47など)に細分できる。またII期の土器は、13～17、25、27、29、32～34、37、38、40、42、43などである。

Bトレンチ1号溝 I期の遺物が少量出土した。1は土師器甕で、口径15.6cmを測る。口縁部は直線的にのび、端部を雑に仕上げる。摩耗が著しく、外面の調整は不明である。2は弥生土器壺口縁部で、小片のため傾きに不安を残す。復元口径9cm弱を測り、口縁端部外面に1条の沈線がかすかに認められる。外面にミガキ調整を施すが、内面は摩耗のため不明である。

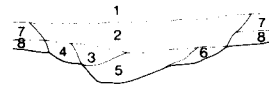
Bトレンチ南端大溝 3～39は覆土上層中より出土した。3～11はI期の弥生土器有段口縁の甕である。3は口径14.8cmを測り、器肉は口縁端部に至り、急激に薄くなる。胴部内面にケズリ調整を施す。4は口径15.6cmを測る。擬凹線文をもつ口縁部の下端の屈曲は明瞭である。胴部内面にケズリ調整、外面に若干粗いハケ調整を施す。5は口径16.9cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。胴部調整は4と同様である。6は口径17.0cmを測り、外面にススが付着する。9条1単位の擬凹線文を加える口縁部は直立し、口縁端部は平坦に仕上げる。ナデ肩気味の胴部は外面ハケ調整、内面ケズリ調整の後、外面を波状文で加飾する。7は口径15.4cmを測り、器肉は厚い。外傾する口縁部外面に9条1単位の擬凹線文を加え、口縁端部は丸く仕上げる。8は口径17.8cmを測り、外面頸部より下にはススが付着する。外反気味の口縁部外面に7条1単位の擬凹線文を加える。胴部内面はケズリ調整である。9は口径18.5cmを測り、頸部より上には内外面ともススが付着する。口縁部外面は10条1単位の擬凹線文が、内面には指頭圧痕が認められる。胴部内面にケズリ調整、外面に細かいハケ調整を施す。10は口径12.0cmを測り、直立する口縁部下端は稜状を呈する。口縁部外面にかすかに擬凹線文が残る。11は口径13.7cmを測る。頸部より上は内外面ともナデ調整を施し、口縁部は先細る。12はI期の薄手の土師器甕で、口径18.8cmを測る。ナデ肩の胴部は内面にヨコ方向のケズリ調整、外面にハケ調整を施す。

Aトレンチ1号溝



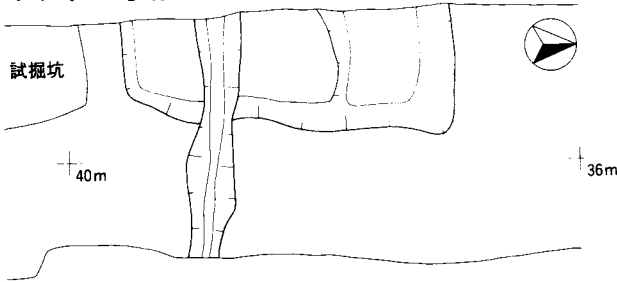
西壁土層図

L=5.50m



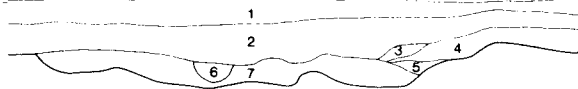
- 1 耕作土（灰色土）
- 2 灰色粘質土
- 3 灰色粘質土と灰茶色砂の混合土
- 4 灰色粘質土（しまりが無い）
- 5 灰色砂と灰色粘質土が交互に堆積
- 6 灰色粘質土と灰色砂の混合土
- 7 淡灰色粘質土（褐色がかかる）
- 8 褐色粘質土

Aトレンチ2号溝、1号土坑



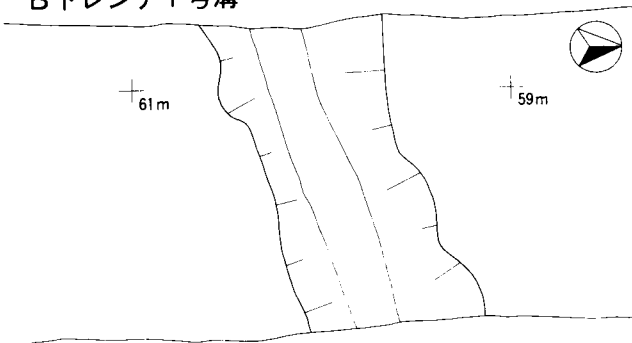
西壁土層図

L=5.50m



- 1 耕作土（灰色土）
- 2 淡灰色粘質土
- 3 淡灰色粘質土（2より明るい）
- 4 褐色粘質土
- 5 黄灰色粘質土
- 6 灰色粘質土（1号溝覆土）
- 7 暗灰色強粘質土

Bトレンチ1号溝

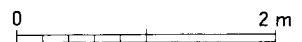


西壁土層図

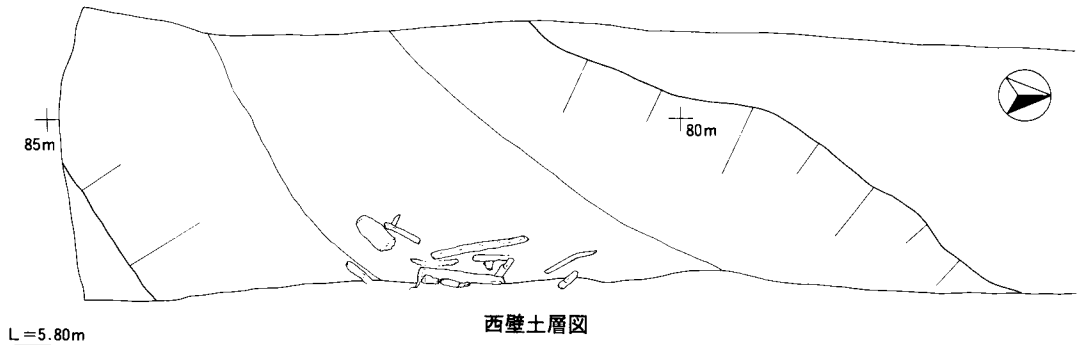
L=5.70m



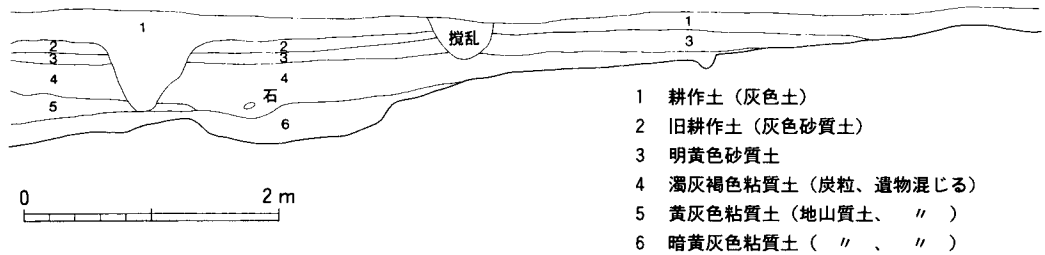
- 1 耕作土（灰色土）
- 2 暗灰褐色粘質砂



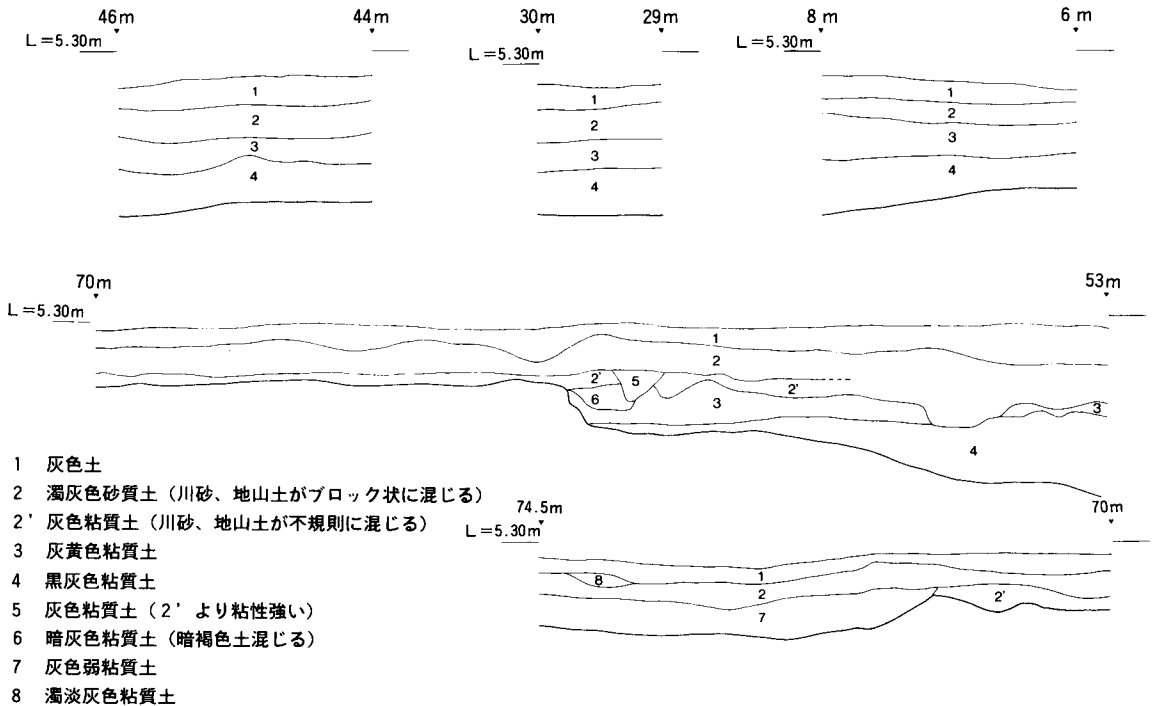
第5図 A、Bトレンチ遺溝実測図（S=1/60）



L=5.80m

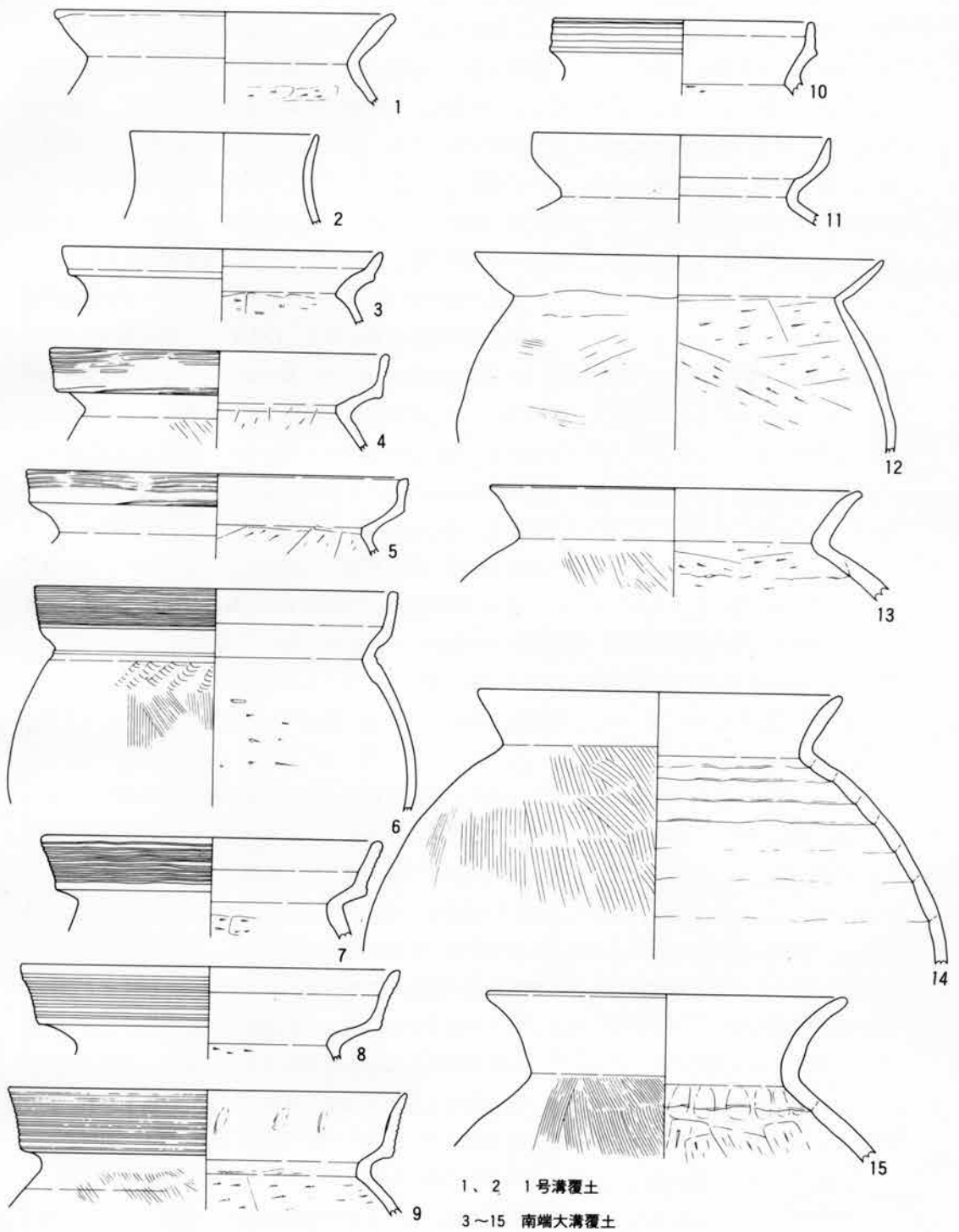


第6図 Bトレンチ南端大溝実測図 (S=1/60)



第7図 Cトレンチ南壁土層柱状図 (S=1/60)





0 10cm

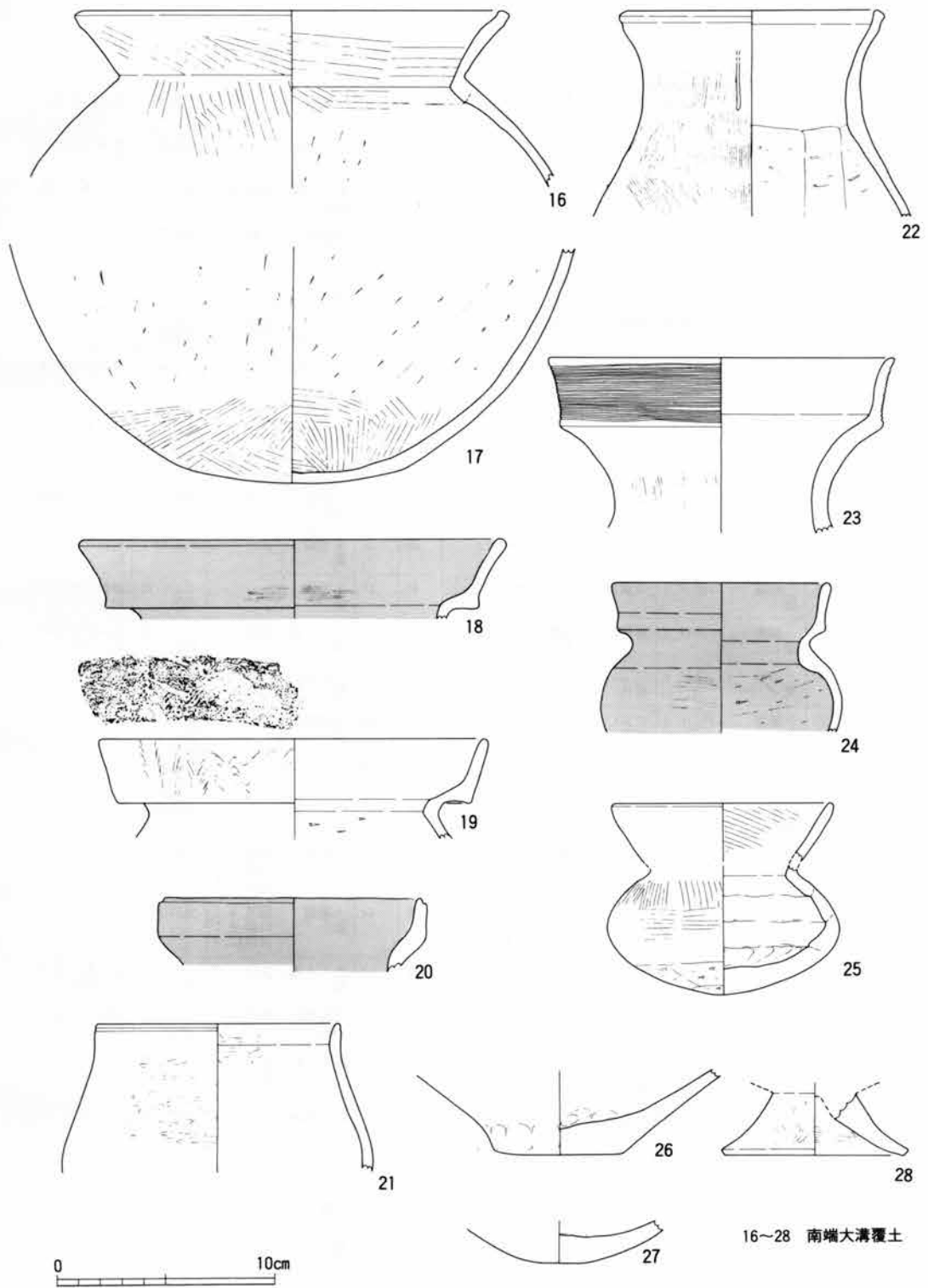
第8図 Bトレンチ出土遺物実測図1 (S=1/3)

13～17はⅡ期の土師器甕である。13は口径17.2cmを測り、外面および口縁部内面にススが付着する。外反する口縁端部は丸く仕上げる。胴部内面にケズリ調整、外面に粗いハケ調整を施す。14は口径16.8cmを測り、外面にススが付着する。口縁部は外反気味に短くのびる。ナデ肩の胴部内面には粘土接合痕が残る。15は口径16.4cmを測り、口縁部は外反しながら長くのび、口縁端部を丸く仕上げる。胴部内面は粗いケズリ調整であるため、頸部付近内面には粘土接合痕が確認できる。外面は粗いハケ調整を施す。16は口径20.2cmを測り、17と同一個体の可能性が高い。平坦に仕上げる口縁端部は内側で若干肥厚する。内外面とも粗いハケ調整を施し、胴部内面はケズリ調整を加える。17は丸底を呈する。粗いハケ調整の後、底部を除きケズリ調整を加える。

18～24はⅠ期の弥生土器壺類である。有段口縁の18は口径19.4cmを測り、外傾する口縁部下端は稜状を呈する。内外面とも精緻なミガキ調整の後に赤彩を施す。19も有段口縁の壺で、口径17.9cmを測る。直線的にのびる口縁部外面に波状文を加える。20は器肉が厚く、有段口縁状を呈する。口径11.8cmを測り、口縁端部を沈線状に一度くぼませる。調整は摩耗が著しいため不明瞭だが、内外面ともかすかに赤彩が残る。21は2と同形態を呈すると考えられ、口径11.1cmを測る。内外面とも精緻なミガキ調整を施した後、口縁端部外面に1条の沈線を加える。22は胴部より口縁部へなだらかに屈曲し、口径11.1cmを測る。直立気味の口縁端部は平坦に仕上げ、内面はケズリ調整、外面はタテ方向の細かいハケ調整を施す。外面頸部～口縁部にはタテ方向の1条の線刻が認められる。23は有段口縁の壺で、口径15.8cmを測る。外反気味の口縁部外面には5条1単位の擬凹線文を4回に分けて施す。頸部外面には細かいハケ調整が残る。24は赤彩の有段口縁の壺で、口径9.8cmを測る。器肉は薄く、精品の印象を受ける。28はⅠ期の土師器壺・鉢類の台部と考えられる。先細りながら長くのび、端部を平坦に仕上げる。内面にハケ調整、外面にミガキ調整が認められる。

25、26、29はⅡ期の土師器壺類と考えられる。25は粗製で、復元器高9cm弱、口径9.8cmを測る。底部器肉が厚く、口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面と口縁部内面に粗いハケ調整を施し、底部外面にはケズリ調整を加える。また胴部内面には粘土接合痕、底部内面には菊花状の指押さえ痕が残る。26は底径5.8cmを測り、胴部は直線的に外側に開く。29は大型品の胴部で内外面とも粗いハケ調整を施す。内面のみにススが付着する。27は甕底部と考えられ、器肉が厚い。

30はⅠ期の内外面とも精緻なミガキ調整を施す弥生土器器台である。脚部4ヶ所に径4mm程度の孔を外側から穿つ。二次加熱を受け、ススが付着する。31はⅠ期の弥生土器高坏の脚部と考えられ、端部外端を嘴状に仕上げる。32、33はⅡ期の土師器小型高坏である。32は口径10.2cmを測り、口縁部はやや外反しながらのびる。内外面ともミガキ調整を施す。33も同形態を呈し、脚部に円孔を穿つ。34はⅡ期のコップ状の手捏ね土器で、器高3.0cm、口径4.4cmを測る。黒灰色を呈し、内面に指押さえ痕が残る。35はⅠ期の弥生土器高坏脚部で、3ヶ所に円孔を穿つ。36はⅠ期の土師器器台脚部と考えられる。4ヶ所に径6mm程度の孔を外側から穿ち、外面にミガキ調整を施す。また受け部との接合を良くするための凹凸が認められる。37、38はⅡ期の土師器高坏である。37は口径16.8cmを測り、体部は直線的にのびる。内面に粗いハケ調整を施す。38は口径19.1cmを測る。坏底部と体部の境で明瞭に屈曲し、体部は直線的にのびる。摩耗が著しいものの体部



第9図 Bトレンチ出土遺物実測図2 (S=1/3)

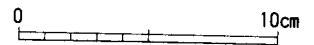
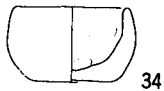
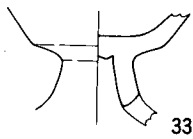
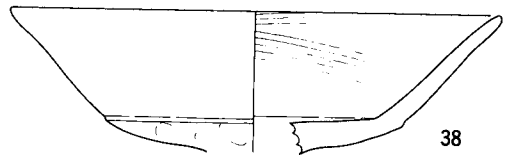
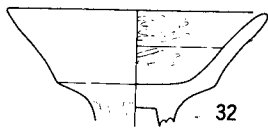
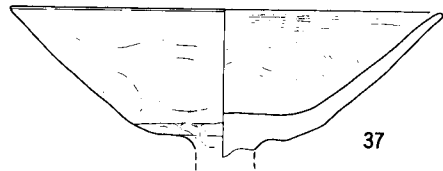
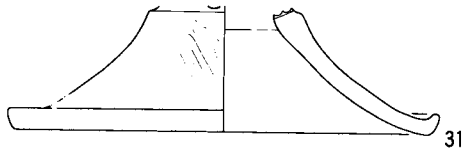
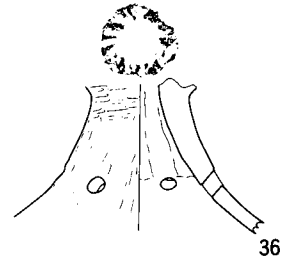
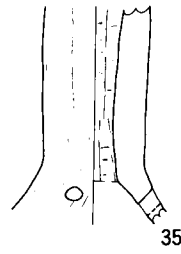
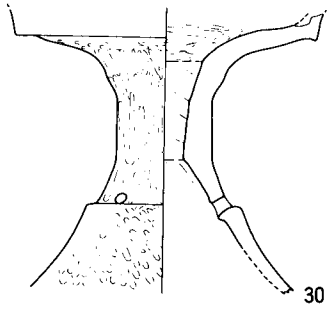
第1表 出土遺物観察表

図版 No	実測 No	器種	法量 (cm)	色調	胎土
1	15	土師器 甕	口径15.6	浅黄橙色	微砂粒を多く 含む。
2	16	弥生土器 壺	口径 8.7	灰白色	砂粒、雲母を 含む。
3	41	弥生土器 甕	口径14.8	淡黄色	砂粒、雲母を 多く含む。
4	9	弥生土器 甕	口径15.6	灰黄色	砂粒、雲母を 少量含む。
5	10	弥生土器 甕	口径16.9	浅黄橙色	砂粒を多く含 む。
6	26	弥生土器 甕	口径17.0	浅黄橙色	砂粒を多く含 む。
7	23	弥生土器 甕	口径15.4	灰白色	微砂粒を多く 含む。
8	21	弥生土器 甕	口径17.8	浅黄橙色	砂粒を含む。
9	32	弥生土器 甕	口径18.5	灰黄褐色	砂粒を少量含 む。
10	24	弥生土器 甕	口径12.0	浅黄橙色	砂粒をやや多 く含む。
11	2	弥生土器 甕	口径13.7	浅黄橙色	微砂粒を含 む。
12	45	土師器 甕	口径18.8	浅黄橙色	砂粒をやや多 く含む。
13	18	土師器 甕	口径17.2	黒灰色	砂粒を少量含 む。
14	59	土師器 甕	口径16.8	にぶい黄 橙色	微砂粒を含 む。
15	39	土師器 甕	口径16.4	にぶい黄 橙色	砂粒をやや多 く含む。
16	14	土師器 甕	口径20.2	にぶい黄 橙色	砂粒を多く含 む。
17	14	土師器 甕	—	—	—
18	33	弥生土器 壺	口径19.4	灰白色	微砂粒、雲母 を含む。
19	8	弥生土器 壺	口径17.9	灰褐色	砂粒をやや多 く含む。
20	6	弥生土器 壺	口径11.8	にぶい黄 橙色	微砂粒を多く 含む。
21	22	弥生土器 壺	口径11.1	浅黄橙色	微砂粒を含 む。
22	30	弥生土器 壺	口径11.5	にぶい黄 橙色	微砂粒を多く 含む。
23	5	弥生土器 壺	口径15.8	淡黄色～ 灰白色	砂粒を多く含 む。
24	19	弥生土器 甕	口径 9.8	浅黄橙色	微砂粒を少量 含む。
25	43	土師器 甕	器高 8.9 口径 9.8	にぶい黄 橙色	微砂粒をやや 多く含む。
26	1	土師器 壺	底径 5.8	灰色	微砂粒を多く 含む。
27	60	土師器 甕?	—	浅黄橙色	微砂粒をやや 多く含む。
28	29	土師器 壺・鉢?	台径 8.2	浅黄橙色	微砂粒をやや 多く含む。

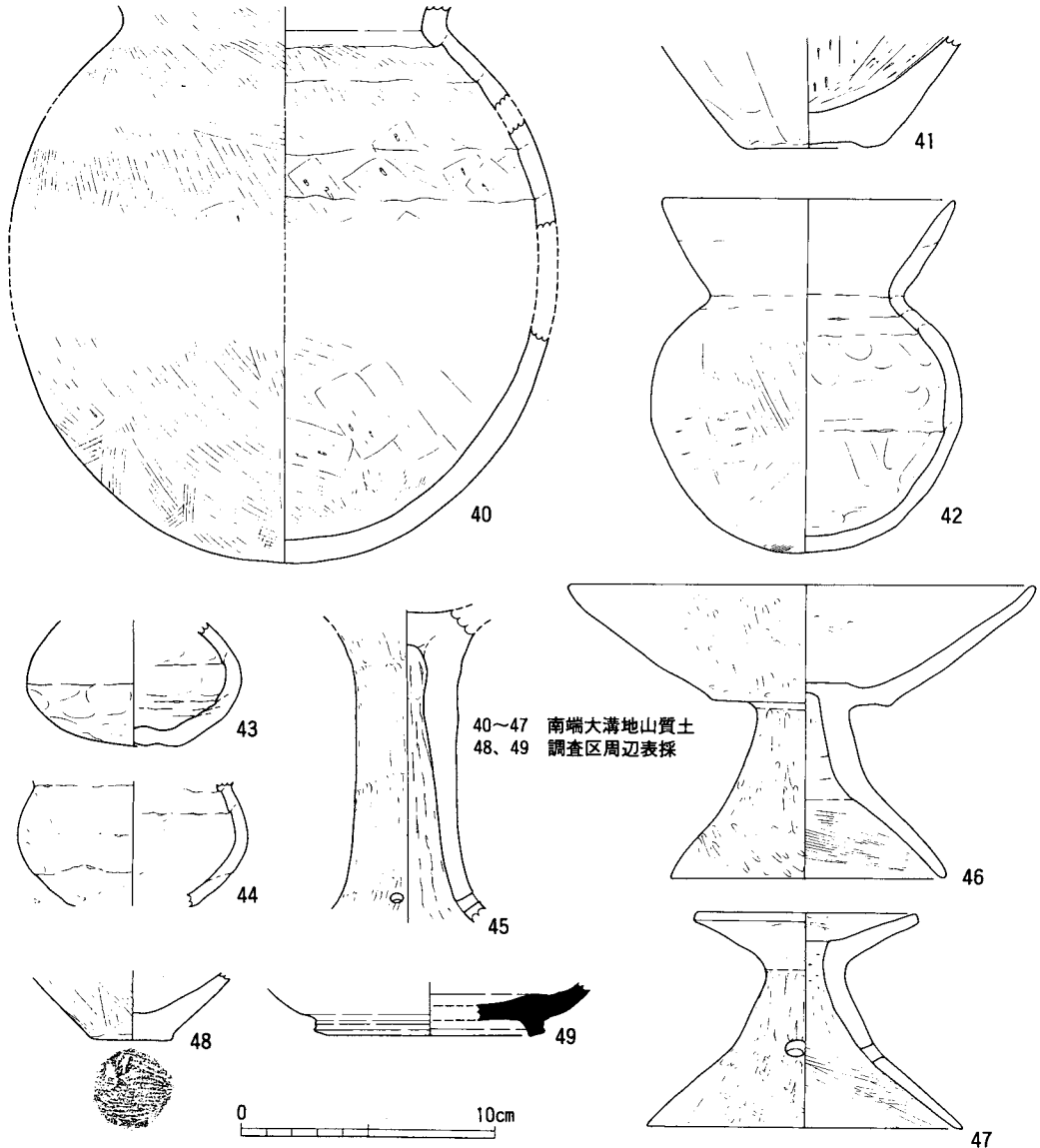
図版 No	実測 No	器種	法量 (cm)	色調	胎土
29	17	土師器 壺	—	浅黄橙色	砂粒をやや多 く含む。
30	13	弥生土器 器台	—	浅黄橙色	微砂粒をやや 多く含む。
31	31	弥生土器 高坏?	台径16.4	にぶい黄 橙色	赤色粒を含 む。
32	25	土師器 高坏	口径10.2	浅黄橙色	微砂粒をやや 多く含む。
33	28	土師器 高坏	—	浅黄橙色	微砂粒をやや 多く含む。
34	4	土師器 手捏土器	器高 3.0 口径 4.4	灰褐色～ 黒褐色	微砂粒を多く 含む。
35	36	弥生土器 高坏	—	浅黄色	微砂粒を少量 含む。
36	34	土師器 器台?	—	にぶい黄 橙色	砂粒をほとん ど含まず。
37	40	土師器 高坏	口径16.8	灰黄色	砂粒をやや多 く含む。
38	7	土師器 高坏	口径19.1	浅黄橙色	砂粒をやや多 く含む。
39	3	須恵器 甕	—	灰白色	砂粒を多く含 む。
40	47	土師器 甕	—	にぶい黄 橙色	砂粒を多く含 む。
41	37	弥生土器 壺	底径 5.2	にぶい黄 橙色	微砂粒をやや 多く含む。
42	46	土師器 壺	器高14 口径11.2	にぶい黄 橙色	砂粒をやや多 く含む。
43	20	土師器 壺	—	にぶい黄 橙色	—
44	38	弥生土器 壺	—	浅橙色	—
45	35	弥生土器 高坏	—	浅黄橙色	微砂粒を少量 含む。
46	42	土師器 高坏	器高11.5 口径18.1 台径10.8	浅黄橙色	微砂粒を含 む。
47	44	土師器 器台	器高 8.5 口径 8.7 台径12.4	浅黄橙色	微砂粒をやや 多く含む。
48	12	弥生土器 甕	底径 3.2	にぶい黄 橙色	微砂粒をやや 多く含む。
49	11	須恵器 有台坏	台径 9.0	明青灰色	砂粒を少量含 む。
50	木4	漆塗下駄	長さ17.8 幅 8.9 厚さ 2.4	台裏黒漆 台裏朱漆	右足用
51	木2	黒漆塗碗	台径 6.3	全面に黒 漆	—
52	木1	曲物	器高 3.0 口径 8.1	—	—
53	木3	底板	径 11.8 厚さ 1.2	—	補修痕あり。
54	5	凝灰岩	—	—	ノミ痕あり。



29~39 南端大溝覆土



第10図 Bトレンチ出土遺物実測図3 (S=1/3)



第11図 Bトレンチ他出土遺物実測図 (S=1/3)

内面に粗いハケ調整が認められる。39はⅢ期の須恵器甕肩部である。内面に同心円タタキ、外面に平行タタキを施す。両面とも自然釉が付着、胎土より南加賀窯跡群産と考えられる。

40~47は地山質の黄灰色粘質土、地山質の暗黄灰色粘質土より出土し、Ⅰ・Ⅱ期の土器が混在する。40は球胴形を呈したⅡ期の土師器甕で、外面にはススが付着する。胴部内外面とも粗いハケ調整を施した後、一部にケズリ調整を加える。また内面上半には粘土接合痕が認められる。41はⅠ期の弥生土器壺底部で、底径5.2cmを測る。内面ケズリ調整、外面ハケ調整を施す。42はⅡ期の土師器壺で、器高14.0cm、口径11.2cmを測る。煮沸によるスス・黒斑が認められる。口縁部はやや内湾気味にのびる。胴部内面には粘土接合痕が残り、外面は細かいハケ調整の後に中程にケズリ調整を加える。43は粗製の土師器小型壺で、内外面とも指押さえ痕が認められる。44は弥生土器小型壺で、外面に赤彩を施す。43はⅡ期に、44はⅠ期に属する。45はⅠ期の弥生土器高坏脚

部で、4ヶ所に径5mm程度の孔を穿つ。外面はタテ方向の丁寧なミガキ調整を施す。46、47はI期に属する。46は土師器高坏で、器高11.5cm、口径18.1cmを測る。坏部底部と体部の境を稜状を呈し、直線的に外傾する体部は、口縁部でやや屈曲する。また脚部はなだらかに外側に開く。外面に丁寧なミガキ調整を施す。47は土師器器台で、器高8.5cm、口径8.7cmを測る。受け部端部を平坦に仕上げ、脚部は先細りながら外側に大きく開く。また脚部中程3ヶ所に6mm程度の孔を穿つ。外面および受け部内面に丁寧なミガキ調整が、脚部内面下半に粗いハケ調整を施す。

調査区周辺表面採取 48はI期の甕類底部と考えられ、底径3.2cmを測る。外面にハケ調整を施し、底部内面には炭化物がこげつくように附着する。49は奈良時代の有台坏底部で、断面方形の台部は外展する。胎土から南加賀窯跡群産と考えられる。

### 第3節 Cトレンチ

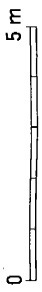
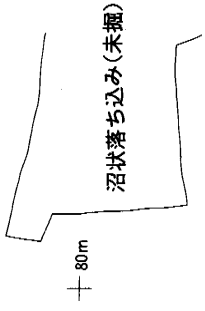
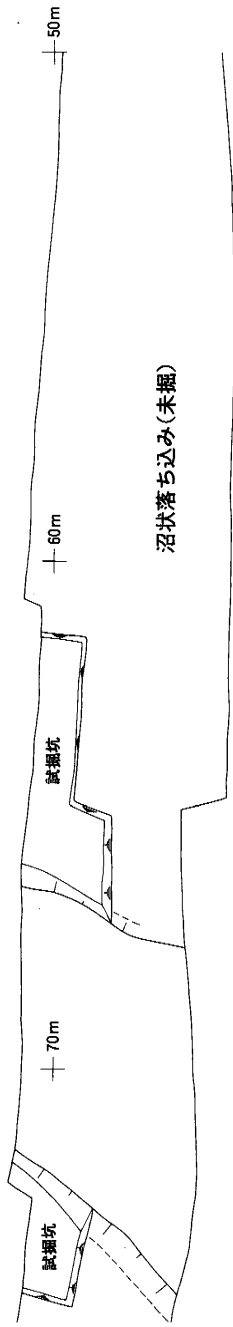
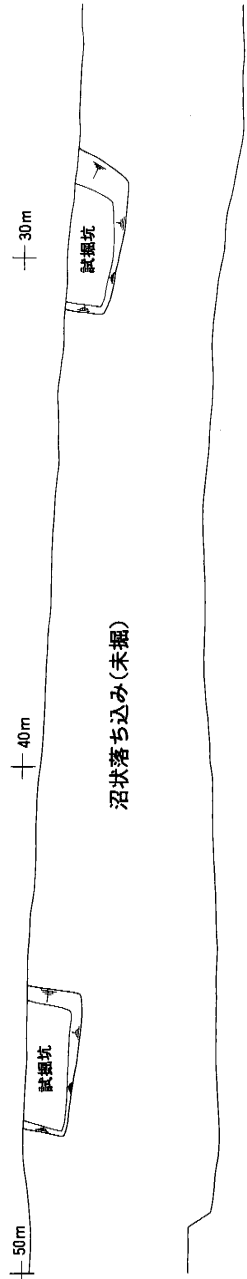
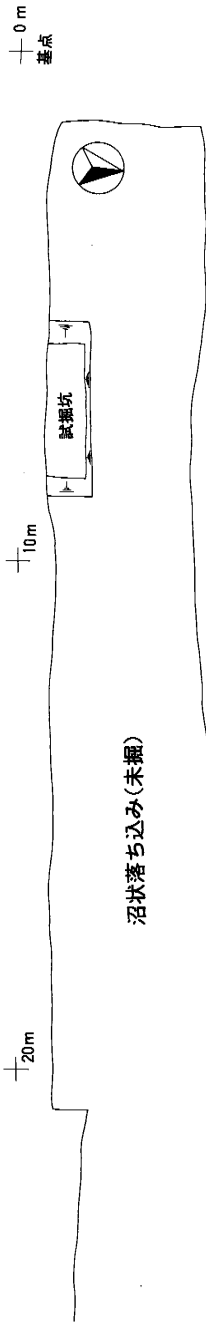
#### 1. 遺構 (第7、12図)

起点より東側65～75m付近で地山面が検出できる他は、鍋谷川の旧流路もしくは氾濫原と考えられる沼状落ち込みとなる。地山土が確認できる部分では、遺構は確認できなかった。また沼状落ち込みに関しては、湧水が著しいため、堆積土の状況把握のための部分的な確認調査をおこなうにとどめた。

調査区南壁での基本土層層序(第7図)は、上層より第1層：灰色土、第2層：濁灰色～灰色粘質土、第3層：灰黄色粘質土、第4層：黒灰色粘質土、第5層：明青灰色～黄灰色粘土となる。第1層は現耕作土、第2、3層は盛土で、過去の耕地整理によるものと考えられる。調査区周辺が戦後しばらくまで舟付き場として利用されていたとの地元の方のご教示から、その上限の時代は新しいと考えられる。第3、4層は自然堆積土である。第4層は未分解の植物遺体を多く含むことから、水が豊富にある沼状落ち込みを呈した時代のもの、第3層はある程度水の引いた時代のものと考えられる。第5層は地山土で、6m地点で50cm前後の厚さを持ち、その下層は湧水の激しい青灰色粗砂となる。現在の水田面の標高は6m地点で5m前後を、62m地点で5.20mを測り、西側に向けて緩やかな傾斜を示す。また地山面の標高は6～47m地点が4.00～4.20mと比較的安定した数値を示す。そして62m付近から上流側に向けて次第に高くなり、66m付近で更に一段たちあがる。66～74.5m地点では4.60～4.80mを測る。

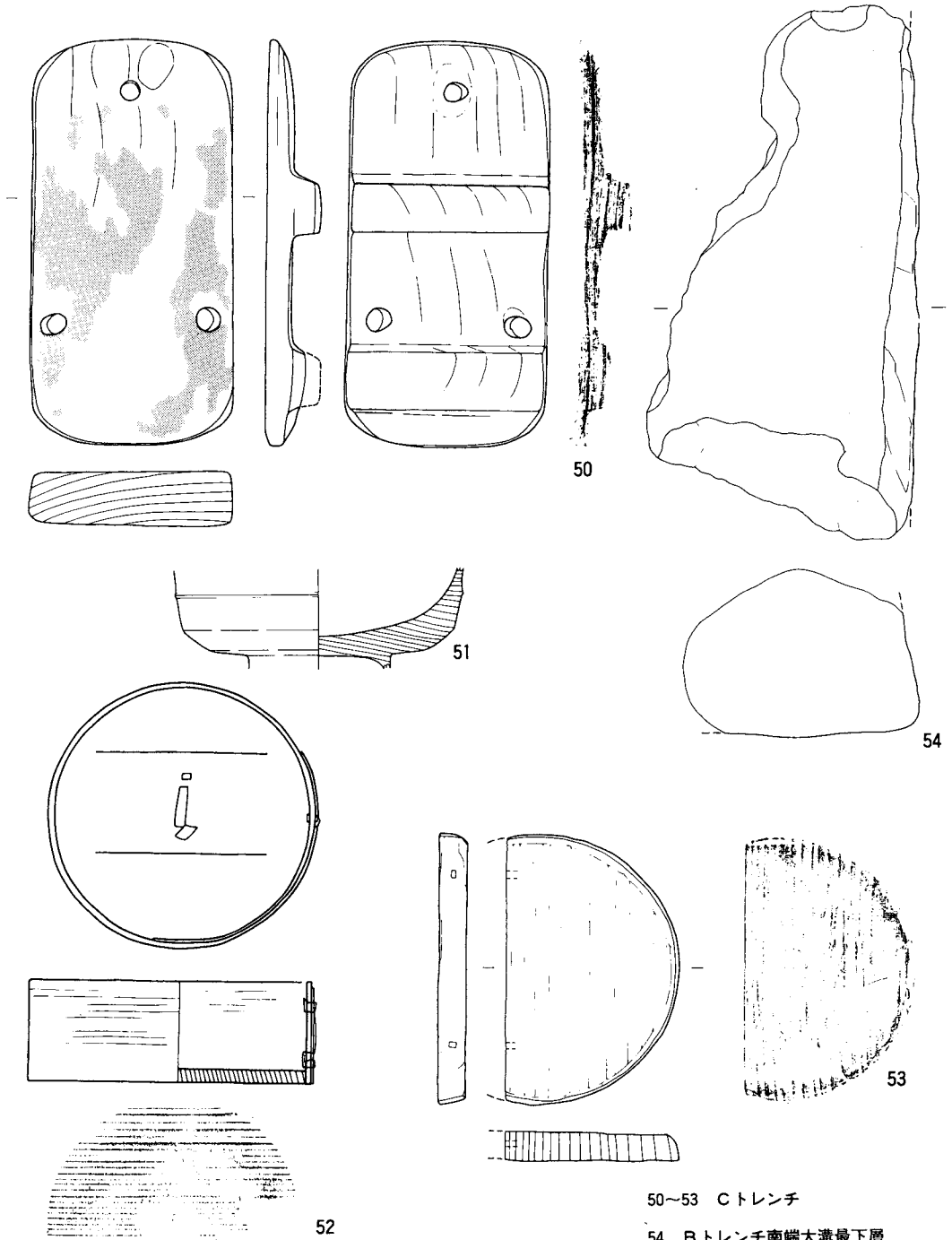
#### 2. 出土遺物 (第13図)

図化した木製遺物50～53は、第4層中から出土した。いずれも共伴土器がないため時代不明である。また科学的鑑定を実施していないため、52、53が杉と考えられる他は材質不明である。50は台表に黒漆、台裏に朱漆を施した平面隅丸長方形の下駄で、歯部は作り出す。最大長17.8cm、最大幅8.9cm、歯部を含めた厚さ2.4cmを測る。また前緒穴は中央につき、横緒穴は内傾して穿たれる。それぞれ径約0.8cm、1cm前後を測る。台表は前緒穴両側に足指痕が残る他、漆の剥げ具合から右足用と考えられる。歯部は使用による摩耗が著しい。51は黒色漆碗である。内面は円滑に



第12図 Cトレンチ遺構実測図 (S=1/150)





第13図 Cトレンチ他出土遺物実測図 (S=1/3, 52のみ1/2)

仕上げるのに対して、外面は体部中程に稜をもつ。台部は比較的内側に作り出し、径約6.3cmを測る。52は小型の曲物で、径8.1cm、高さ3.0cm、底板厚さ0.4cmを測る。側板は一重に周り、樹皮で綴じ合わせる。また底板をとめるための目釘は使用されていない。53は曲物等の底板と考えられる。径11.8cm、厚さ1.2cmを測る。側面は、図でいえば上側に内傾する。割れ口には黒色の色調をもつ接着材と、断面方形の目釘(2ヶ所)による補修が認められる。なお第4層中からは古墳時代と考えられる摩耗した土師器小片が数点出土したが、図化不能であった。

## 第4章 まとめにかえて

今回の調査では調査範囲が狭いことに加え、調査区のほとんどが削平もしくは河川の氾濫で損壊を受けており、同遺跡の内容を十分に把握することができなかった。確認できた事項としては、微高地上に立地した比較的小規模な集落遺跡であること、弥生時代後期後半～古墳時代初頭、5世紀前半を中心とする古墳時代中期、奈良・平安時代前期にそれぞれ短期間のみ存続したこと、遺跡の中心は削平等による損壊が進んでいる可能性が高いことがあげられる。

本遺跡の存続時期は、各時期とも県内では集落遺跡の増加時期にあたり、それと軌を一にした動きといえよう。ただし、いずれも長期間の集落とはなり得ず、短期間のうちに終焉を迎える特徴をもつ。その理由としては、周辺地域の地下水位が高く、排水が困難な地域であること、また鍋谷川の氾濫を常に気にする必要がある地域であることから、その開発・維持には多大な努力を強いられたことがあげられよう。そのため、集落の増加時期のみに、より安定した微高地上に立地する集落から、分村的に成立する小規模な集落であったと考えられる。このことは中世以降や現在の集落が、より北側の地域に立地することからも、ある程度裏付けられよう。

また本遺跡周辺の低地は、かつて広範な地点から土器が採取されることから、大規模な集落遺跡の存在が推定されてきた。しかし今回の調査や県営ほ場整備事業に伴う分布調査の結果は、集落遺跡の推定範囲は大きく縮小させるものであった。この格差の理由としては、本遺跡周辺地域の水田化が考えられる。本来は鍋谷川的作用により微高地と低地が複雑に入り組んだ地形を呈していたものが、現在の平坦な水田風景に至る過程で大規模な土砂移動がおこなわれ、微高地上の集落遺跡が損壊を受けたためとの想定が成り立つ。このことが、本遺跡周辺の集落遺跡の動向把握をかなり困難な状況にさせていると考えられる。

### 引用・参考文献

- 『角川日本地名辞典』17 石川県 角川書店 1981
- 『佐々木ノテウラ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986
- 『漆町遺跡1』 石川県立埋蔵文化財センター 1986
- 『和田山下遺跡』 寺井町教育委員会 1987
- 『辰口町・高座遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会 1987
- 『寺井町史』第3巻 寺井町史編纂委員会 1994

# 图 版





(1) 表土除去作業（南から）



(2) 完掘状況（南から）



(1) 1号溝完掘状況  
(南から)



(2) 2号溝、1号土坑  
完掘状況(東から)



(3) 10m西壁土層状況  
(東から)



(1) 完掘状況（南から）



(2) 南端大溝完掘状況（北から）



(1) 南端大溝完掘状況（南西から）



(2) 同上遺物出土状況（東から）





(1) 1号溝完掘状況（北から）



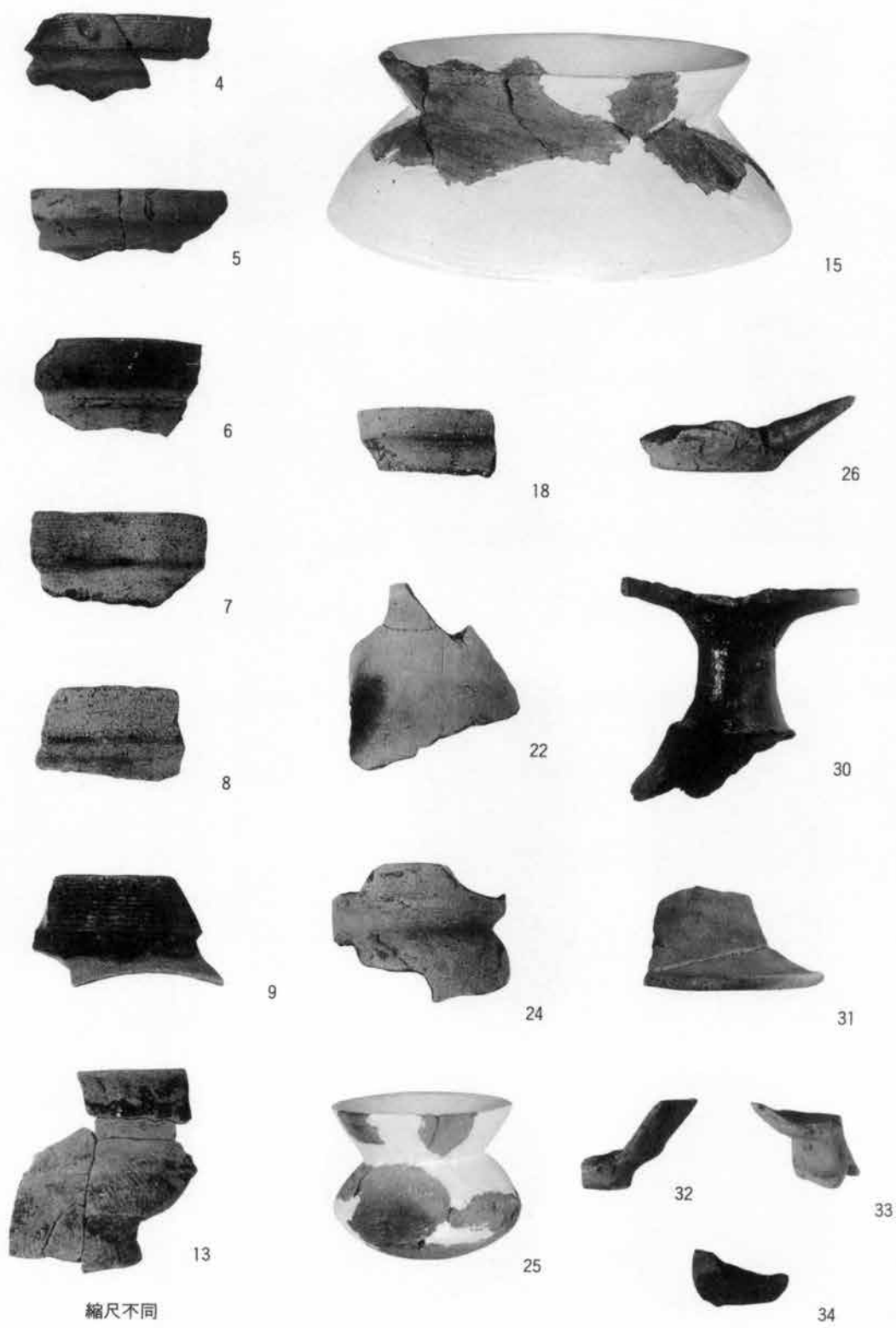
(2) 作業風景



(1) 完掘状況（北東から）



(2) 70m付近完掘状況（北西から）



縮尺不同



37



39



40



45



46



47



49

縮尺不同



50



51



54

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	てらいまちさの いせき							
書 名	寺井町佐野A遺跡							
副 書 名	基幹排水対策特別事業佐野地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編 著 者 名	川畑 誠							
編 集 機 関	石川県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒921 石川県金沢市米泉町4丁目133番地 電(0762)43-7692							
発行年月日	西暦1995年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
さの いせき 佐野遺跡	いしかわけんの 石川県能 みぐんでらい 美郡寺井 まちさの 町佐野	17322	26	36° 25' 15"	136° 30' 30"	19910507 } 19910601	500	基幹排水 対策特別 事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
佐野遺跡	集落遺跡	弥生時代 後期～古墳時代 初頭、古墳時代 中期、奈良・平安時代	溝 4条 土坑 1基	弥生土器、土師器、 須恵器、木製品				

## 寺井町佐野 A 遺跡

---

平成 7 年 3 月 27 日 印刷・発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町 4 丁目133番地  
〒921 電話 (0762) 43-7692番代

印刷 北國書籍印刷株式会社

---

©石川県立埋蔵文化財センター 1995